

【参考文献】

- 石垣福雄 (1983) 『北海道方言辞典』(北海道新聞社)
- 尾崎喜光 (1987) 「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷一名詞篇一」『日本学報』6
- 尾崎喜光 (1989) 「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷一名詞篇(2)一」『日本学報』8
- 尾崎喜光 (2014) 「中間世代のことば」『日本語学』33-1
- 尾崎喜光・朝日祥之 (2013) 「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その2-音韻・アクセント項目から見る一」(北海道方言研究会第205回例会発表; 2013年11月10日) [『北海道方言研究会会報』第90号(2013年12月発行)に所収]
- 小野米一 (1993) 『北海道方言の研究』(学芸図書)
- 小野米一 (2001) 『移住と言語変容-北海道方言の形成と変容一』(溪水社)
- 竹本拓也 (2010) 「北海道帯広市方言のアクセント」『方言・音声研究』4

札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 第三次報告 ～バリエーションを支配する「言語内的要因」に関する一考察～¹

高野照司 (北星学園大学)

1. はじめに

1990年暮れ、札幌市内で最も札幌らしいと言われる中央区山鼻地区で札幌方言アクセントの共通語化に関する大規模な調査が行われた(小野1991, 1993)。二会場で二日間にわたる面接調査が行われ、小学5年生20名、中学2年生20名、20代16名、30代16名、40代16名、50代17名、60代16名、70代15名、総勢128名の生え抜き住民から、単音節・単独文読み上げ・長文朗読などの音声資料が収集された。それからおよそ四半世紀が経過した今、札幌市の方言アクセントはどのような変化を遂げたのか。

本稿では、上記調査(以下、「調査I」とする)を先行研究として、筆者が同地区で2010年から継続的に行っている実時間パネル調査²(以下、「調査II」とする)から成果の一部を論じる³。中でも特に共通語化のプロセスで必然的に観察される変異(揺れ)に内在する規則性(Weinreich et al. 1968)に着目し、その規則性を支配すると思われる「言語内の制約条件」の存在を仮説として提起し、その妥当性を多変量解析の一種である Varbrul を用いた統計的手段により立証する(Labov 1972, Sankoff & Labov 1979, 松田 2006)。分析にあたっては、先行調査(小野1993)ですでに結果が開示されている1～4拍名詞146項目を対象とする(表1)。これらの名詞は、調査I・調査IIともに文章の中に埋め込まれ、読み上げられたものである。

表1 1～4拍名詞アクセントの類型(共通語型)と具体例(小野1993より)

1拍(15項目)	I類(○▼)	柄が(長い)・血が(出た)、など5項目
	II類(○▼)	葉が(散る)・日が(昇る)、など3項目
	III類(●▼)	絵が(うまい)・歯が(白い)、など7項目
2拍(80項目)	I類(○●▼)	鼻が(高い)・鉛を(なめる)、など12項目
	II類(○●▼)	櫓が(見える)・紙を(切る)、など12項目
	III類(○●▼)	花が(咲いた)・髪を(切る)、など12項目
	IV・V類-二拍目広母音(●○▼)	空が(青い)・船が(浮かんでいる)・糸が(太い)、など12項目
	IV・V類-二拍目狭母音(●○▼)	唇が(ある)・松が(見える)、など12項目
3拍(46項目)	A型 ○●●▼	机が(低い)・背中が(かゆい)、など21項目
	B型 ○●●▼	毛抜きが(要る)・力が(強い)、など7項目
	C型 ○●○▼	小豆が(取れる)・つつじが(咲く)、など3項目
	D型 ●○○▼	姿が(美しい)・命が(惜しい)、など15項目
4拍(25項目)	○●●●▼	そろばんが(うまい)、など
	●○○○▼	挨拶を(する)、など
	○●○○▼	果物を(食べる)、など
	○●●○▼	大雨が(降る)、など
	○●●●▼	弟が(いる)、など

2. パネルデータから見る四半世紀後の変化の動向: 調査I～調査II

今回の再調査(調査II)では、調査I当時60～70歳代の被験者を除く97名を調査対象として

いるが、特に調査Ⅰ当時、20代・中学生・小学生高学年だった若い世代（現在40～20代）の住民の調査が難航している。現在までのところ、

- 70代（当時50代）話者9名【男3・女6】
- 60代（当時40代）話者8名【男4・女4】
- 50代（当時30代）話者6名【男3・女3】
- 40代（当時20代）話者5名【男2・女3】
- 30代（当時小・中学生）女性話者1名、

合計29名の調査を完了しているが、若い世代の話者については今後も調査を継続する予定である。⁴ また、本調査の第二次報告（高野2014a）において、札幌市生え抜きの大学生6名（男2・女4）による読み上げ音声を経年的比較のためにデータベースに追加した。

表2（70歳代8名）・表3（60歳代9名）・表4（50歳代6名）・表5（40歳代5名）では、名詞の拍数による共通語的アクセントの産出の割合（%）の男女別および全体の平均値を調査Ⅰ（1990年）と本調査Ⅱ（2010～2012年に調査実施）間で比較した。共通語的アクセント型で発音された項目には1点、そうでない項目には0点、複数回発音された項目にはそれらの平均点を付け、総点146点（100%）から各被験者ごとに得点割合を算出した。⁵

本調査における共通語アクセントか否かの判断は、個人語の生涯変化を主な分析の射程としているため、厳密に調査Ⅰと同じ基準に基づいて行った。しかし、過去20年間で共通語（東京方言）自体における当該名詞アクセントの変化や新型アクセントとの併用などの可能性は否めない。また、共通語的アクセントの他に、テレビなどのメディアが広めるテレビ型アクセントも存在するため、今後はそういった動的側面も加味した分析を行っていききたいと考えている。

表2～5中、太字下線部は全体平均の経年的推移と比較して顕著（3%程度以上）と思われる共通語への経年的変化、二重下線部は共通語化には反する方言形への変化を示す。

表2 70代（1990年当時50代）話者8名 共通語化指標（割合%）

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者3名	1990	<u>76.8</u>	58.5	37.2	81.3	63.5
	2010	<u>84.4</u>	59.7	38.5	82.7	66.3
女性話者5名	1990	<u>80.7</u>	64.8	<u>48.0</u>	78.0	70.4
	2010	<u>88.6</u>	64.7	<u>52.2</u>	77.6	70.3
全話者8名	1990	85.5	62.5	<u>49.5</u>	79.3	67.8
	2010	85.8	62.8	<u>47.1</u>	79.5	68.8

表3 60代（1990年当時40代）話者9名 共通語化指標（割合%）

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者4名	1990	96.7	68.6	53.8	81.9	75.0
	2010-11	96.7	68.3	53.8	80.1	74.8
女性話者5名	1990	<u>95.9</u>	<u>69.5</u>	55.8	80.4	75.6
	2010-11	<u>91.8</u>	<u>72.6</u>	57.9	82.0	76.1
全話者9名	1990	96.3	69.1	54.9	80.8	75.3
	2010-11	94.0	70.7	56.1	81.2	75.5

表4 50代（1990年当時30代）話者6名 共通語化指標（割合%）

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者3名	1990	97.8	85.3	77.1	<u>86.7</u>	86.5
	2011-12	100	85.6	78.3	<u>82.7</u>	86.6
女性話者3名	1990	<u>96.7</u>	74.2	<u>87.4</u>	<u>84.0</u>	80.6
	2011-12	<u>100</u>	76.7	<u>80.1</u>	<u>78.7</u>	78.9
全話者6名	1990	97.1	79.9	71.8	<u>85.3</u>	83.6
	2011-12	100	81.1	69.2	<u>80.7</u>	82.8

表5 40代（1990年当時20代）話者5名 共通語化指標（割合%）

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者2名	1990	100	89.6	83.7	84.0	89.4
	2011-12	100	92.3	81.5	84.0	87.0
女性話者3名	1990	100	91.6	76.1	85.3	88.3
	2011-12	100	92.3	79.0	85.3	89.1
全話者5名	1990	100	90.8	79.1	84.8	88.7
	2011-12	100	92.3	80.0	84.8	88.3

表2～5のパネルデータから、名詞アクセント体系全般を揺るがすような顕著な経年的変化は観察されない。変化があったとしてもせいぜい数パーセント以内で留まり、共通語へ向けた変化と方言形へ逆戻りする変化の両面が確認できる。特に後者の「反共通語化現象」は、言語形成期に家庭でテレビが普及した「テレビ世代」と言われる50代（調査Ⅰ当時30歳代）の話者層に顕著で（表4）、共通語化におけるテレビの役割がそれを促進する一元的な効果を持つだけではなく、地域方言の多様化に寄与する可能性を示唆する結果として極めて興味深い（馬瀬1996, Stuart-Smith 2013, Ota & Takano 2014）。しかし、この点については「方言への回帰」という解釈の他に、共通語（東京語または漠然とした「テレビ的アクセント」）そのものの経年的変化への反応という解釈も成り立つかもしれない。即ち、調査Ⅰ以降20年間で共通語における当該名詞アクセント自体が変容を遂げ、それがテレビなどのメディアを通して全国に広まり、地域方言を多様化させたという可能性である。今後も検討課題としたい。

さらに、女性の標準形志向は、最年長世代（調査Ⅰ当時50代で現在70代）で若干は見られるものの（表2）、他年齢層では性差はほとんど見られないことから（cf., Trudgill 1972）、調査Ⅰ当時の比較的若い年齢層で共通語的アクセントはすでに威信形とは認識されていなかった可能性が高い。

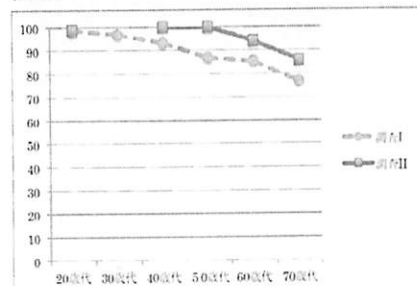
グラフ1～3は、各々1拍～3拍名詞について、調査Ⅰ（1990年）における共通語アクセントの使用割合の平均と調査Ⅱ（2010～12年）で再調査された被験者の使用割合の平均を年齢層別に対応させたものである。本調査の第二次報告（高野2014a）で追加した札幌市生え抜き大学生6名（男2・女4）を加えて図示した（数値の詳細は以下表6参照）。グラフ上、本調査Ⅱにおける40代話者5名は調査Ⅰでは20代、50代話者6名は30代、60代話者9名は40代、70代話者8名は50代の年齢層集団に属することになる。⁶

表 6 (追加データ・2011 年調査) 20 代 札幌出身大学生 6 名 共通語化指標 (割合%)

	調査年	1 拍名詞	2 拍名詞	3 拍名詞	4 拍名詞	全体平均
男性話者 2 名	2011	96.7	94.2	82.6	86.0	89.9
女性話者 4 名	2011	100	92.5	84.7	84.0	90.3
全話者 6 名	2011	98.9	93.1	84.0	84.7	90.2

グラフ 1:

1 拍名詞 調査 I (1990 トレンド) vs.
調査 II (2010~2012 パネル) 年齢層別共通語
化割合



グラフ 3:

3 拍名詞 調査 I (1990 トレンド) vs.
調査 II (2010~2012 パネル) 年齢層別共通語化割合

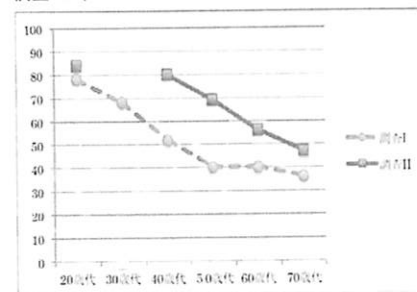
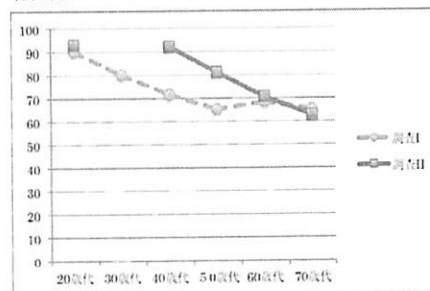


表 2~5 でも確認されたように、共通語化の割合において加齢による個人語の変化 (生涯変化) はほとんど見られなく、各年齢層集団への所属が横へ水平に二段階 (20 歳分) シフトするだけであることが分かる (例えば、グラフ 1 で調査 II の 70 歳代被験者は調査 I の 50 歳代話者集団に所属することになる)。つまり、20 年程度では個人のアクセント体系はほとんど変化しないと言える。ただし、3 拍名詞の経年推移 (グラフ 3) では、調査 I 当時の 50 代 (調査 II では 70 代) と 40 代 (調査 II では 60 代) において若干だが割合の上昇が見られる。これは次節グラフ 4 で言及する生涯変化をおこしたごく少数の例外的話者によるものである。

グラフ 2:

2 拍名詞 調査 I (1990 トレンド) vs.
調査 II (2010~2012 パネル) 年齢層別共通語
化割合



今後も同様の個人語の安定性が持続していくのであれば、1 拍名詞においては今後 10 年程度、2 拍名詞は 20 年程度、3 拍名詞は 30 年程度で、札幌市 (山鼻地区) の大半の話者は共通語的アクセントを使用していることが推測できる。

3. 山鼻実時間調査: これまでの成果の概要

2010 年から山鼻地区での実時間パネル調査を始めて以来、これまで明らかになってきた研究成果の概要を以下 1)~3) にまとめておく (高野 2011, 2014ab)。

- 1) 語彙 (名詞) アクセントにおいて個人語の生涯変化は大多数の話者においては観察されない。全体の数%程度の極めて微細な変化が見られる場合はあるがアクセント体系を揺るがすようなものではない。一方、比較的顕著な程度の生涯変化を示す話者が例外的にごく少数見うけられた (グラフ 4)。
- 2) 小規模な生涯変化は共通語化へ向けたものばかりではなく、新種 (例えば、平板化) の変化も含む。特に「テレビ世代」と言われる 50 代 (調査 I 当時 30 代) で顕著である。
- 3) 単純に名詞の拍数に正比例して共通語化の進捗が鈍いというわけではなく、特に 2 拍名詞・3 拍名詞の順に進捗が遅れ、1 拍・4 拍名詞については共通語化がかなり進んでいる。この「V 字パターン」は大多数の被験者間で約 20 年の時を経て一貫して共有されている。また、若い世代へ向け共通語化の割合は総点においても徐々に上昇し (底上げされ)、上記の V 字パターンも 40 代辺りから目立たなくなっていく。20 代大学生では、フラットな曲線を持つ話者が半数となる (つまり、共通語化と名詞の拍数は無関係になりつつある)。

以下、名詞の拍数ごとに詳細を述べる (表 1 も併せて参照)。

- 3)-1. 1 拍名詞 調査 II の結果から 50 代 (1990 年当時 30 代) 以下の若い世代で共通語化はほぼ完結したと言える。
- 3)-2. 2 拍名詞 共通語化が遅れているのは、II 類名詞 (例 北海道方言的 ○●▼ 名詞 [橋が・紙を、など]) の共通語的 III 類化 (○●▽) と IV・V 類広母音名詞 (例 北海道方言的 ○●▽ 名詞 [空が・船が・糸が、など]) の同類狭母音 ○○▽ 名詞 [箸が・松が、など] への合流である (尾崎 1986)。この傾向は 50 歳代より上の年齢層の話者により共有されており、40 代より若い世代に向け総点の上昇とともに弱まり、20 代大学生では、当該要因は効力がなくなる (曲線はフラット)。

また、小規模ながら共通語へ向けた生涯変化、反共通語的生涯変化のどちらにも主にこれらの類で起こっている。この反共通語的生涯変化では、II 類名詞 (○●▽、「橋が」「石が」など) の平板化 (I 類化 ○●▼) が圧倒的に多い。

- 3)-3. 3 拍名詞 最も共通語化が遅れている 3 拍名詞では、1 拍・2 拍名詞とは異なり、個人差がより大きく、話者間・世代内で共有される変異パターンを見いだすのは難しい。便宜的に項目数の少ない B 型 (7 項目)・C 型 (3 項目) を考慮外として曲線を眺めると、年配世代 (70, 60 歳代) では、A 型 ○●●▼ が D 型 ●○○○▽ を共通語化で先導し、若い世代へ向け D 型が追いつく (または追い越す)。共通語的ではないアクセント型について、特に老年世代 (70 歳代、60 歳代) で A 型 ○●●▼ (机・背中、など)・D 型 ●○○○▽ (姿・命、など) がともに中高である C 型 ○●○▽、次いで B 型 ○●●▽ で発音されるパターンが共有されている。若い世代へ向け B 型・C 型ともに A 型 (平板型) での発音が多くなる。

依然規模は小さいが、生涯変化も両方向 (共通語化、反共通語化) で見られ、2 拍

名詞に比べれば規模は若干大きめである。反共通語化的生涯変化の大部分は、主にB型・C型で起こる。B型(○●●▽)の「刀」「はさみ」「言葉」などはC型(○●○▽)で、「小豆」がA型(○●●▽)で発音され、C型(○●○▽)の「小麦」「つつじ」がA型(○●●▽)で、「心」がB型(○●●▽)で発音されることが多い。他に特異なケースとして、A型(○●●▽)「着物」「葉」がB型○●●▽で、「柱」がD型●○○▽なども見られた。これらの方言回帰事象が、以下に述べる大学生の変異パターンと一致するのは興味深い。

札幌生え抜き大学生の変異から従来の共通語的アクセント類系(表1)とは異なる独自の体系(または従来体系の再編成)が生じつつある可能性が窺える。具体的には、共通語的C型語彙(○●○▽、小麦・つつじ・心、など)が平板のA型(○●●▽)やB型(○●●▽)に分化、共通語的B型語彙(毛抜き、小豆、はさみ、など)がA型やC型に分化、共通語的A型語彙(あくび)はD型(●○○▽)またはC型に揺れるを示す、などといった事象が見られる。

- 3)-4. **4拍名詞** 老年層の数名を除くほとんどの話者で約80%以上の高い割合を示す。特に「テレビ世代」の50代(表4)で反共通語化的生涯変化が目立つ。共通語的ではないアクセントで代表的な項目は、「オルガンを」「三日月が」(○●●●▽)がそれぞれ●○○○▽・○●○○▽に、「チャンネルを」(●○○○▽)が○●●●▽に、「すずらんが」「二次会が」(○●○○▽)が●○○○▽に、「大雨が」「小刀で」(○●●○▽)が○●●●▽などに発音されている。

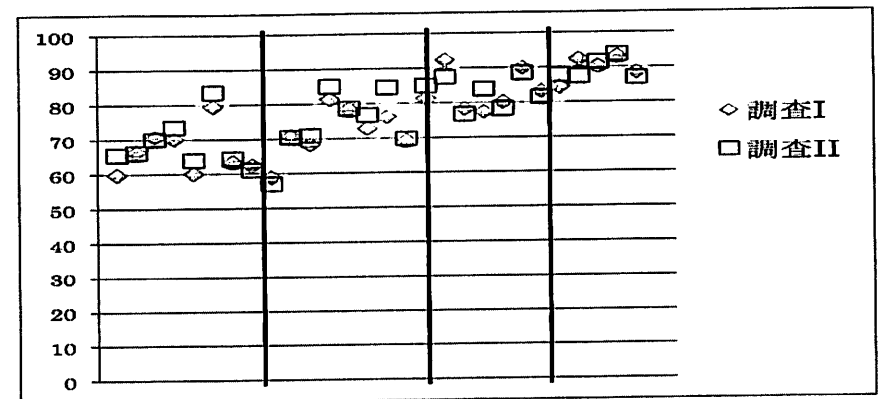
札幌生え抜き大学生では、「チャンネルを」(●○○○▽)、「二次会が」(○●○○▽)がどちらも○●●●▽と平板化し、「小刀」(○●●○▽)が○●○○○▽に発音されるのが一般的である。また、「オルガンを」「三日月が」(○●●●▽)がそれぞれ●○○○▽・○●○○○▽と発音されるのは年配層と同様である。

グラフ4では、1拍～4拍名詞全体の共通語得点の割合における個別話者の分布を調査IとII間で対比した。調査II時点での年齢層ごとに縦線で仕切りを入れ、議論の都合上、グラフ下に話者番号を記載した(例 70-1=70代話者1番)。

グラフ4からは、当然のことながら、共通語化と話者年齢の密接かつ規則的な関係が見て取れる。若い世代へ向け右肩上がりに共通語化得点が上昇するばかりでなく、年齢層集団内での揺れが収束し均質になっていくのが分かる。一方、60代・70代の老年層では、同じ年齢層集団内で共通語化がかなり進行している話者と遅れている話者の差が非常に大きいのも分かる。

個々人の経年的変化(生涯変化)に関しては、これまで見てきた通り、調査IとIIで大きな隔たりを見せる話者はいない。その程度は極めて小規模ではあるが比較的顕著な話者として、話者70-1(男性)、60-7(女性)、50-3(男性)などは共通語へ向けた生涯変化、話者50-1(男性)、40-2(男性)などは方言形への回帰を示す。被験者総集団の動態から外れるこれらの所謂「逸脱者」(outlier)は、言語変異・変化の社会的意味(特に動機付け)を知る上で極めて有益な情報を提供してくれる(Labov 2001)。別な機会を設けて、特に当該話者の社会生活、日常的コミュニケーション網、方言接触、および言語意識や態度に焦点を当てた分析を試みたい。

グラフ4 共通語化得点(1～4拍名詞)割合(%)における年齢層別話者分布
調査I vs. 調査II



話者 70-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 60-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9 50-1, 2, 3, 4, 5, 6 40-1, 2, 3, 4, 5
[70代(調査I:50代)] [60代(調査I:40代)] [50代(調査I:30代)] [40代(調査I:20代)]

4. 多様性に内在する規則性の探求: VARBRUL による解析

先行研究のレビュー及び筆者によるこれまでの経年的調査の成果から、札幌市方言の名詞アクセントの共通語化を左右する要因として、「年齢」「名詞の長さ(拍数)」「アクセント類型」などが明らかになったわけだが、それ以外の要因に言及した研究は過去に見当たらない。また、共通語化への影響力という点で、上記3要因間の相対的な力関係やヒエラルキーも判然としない。もしそれらが明らかになれば、例えば、名詞間での進捗の差や今後の変化予測など、札幌市での名詞アクセントの共通語化がこれまで迎ってきた道筋や今後の方向性について、これまで以上に確かな説明が可能となる。

そこで本節では、変異理論(Labov 1972, 1994)の枠組みで、当該変異が内包する規則性を統制すると思われる諸要因を作業仮説として設定する。その上で、VARBRULと呼ばれる多変量解析により当該仮説の妥当性を検証し、解析から得られる蓋然性指数(probability)を基に共通語化の過去の道筋の把握と今後の変化の動態を推測してみる。変異(従属変数)に影響を与える要因(独立変数)は一般に「言語内的要因」と「言語外的要因」に分けられ、後者はさらに「社会的要因」と「スタイル的要因」に分けられる(松田 2004)。(本調査では、調査票による文章の読み上げタスクのみにより産出された発話をデータとしているためスタイル的要因は考慮外。)以下に作業仮説として、「従属変数」及び「独立変数」をリスト化して提示する。

本稿での新たな試みとして、日常生活における語彙の出現頻度および親密度(馴染み度)を共通語化の揺れと何らかの因果関係があるものと仮定し、すでに公開されている大規模コーパスを援用することで、それらを独立変数(d,e)としてVARBRUL解析に組み込むことにした(リスト内の下線部項目)。「頻度」コーパス(天野・近藤 2003b)は、1985年から1998年の14年間に発行された朝日新聞(朝刊・夕刊)を基に形態素解析により構築され、「単語親密度」コーパス(天野・近藤 2003a)は、『新明解国語辞典第四版』(金田一他、1989)の全見出し語を基に、7段階尺度(1:低-7:高)による親密度の評定実験により構築されたものである。⁷ VARBRUL

解析にあたっては、上記のデータベースから本調査の分析対象となる名詞の頻度・親密度を調べ、拍数ごとに序列化し、数値上の比較的顕著な切れ目でグループ分けをした。結果的に表7のような4レベルでのグループ分け(1:最上位~4:最下位)になった。⁸

従属変数: ⁹	①共通語的アクセント ②共通語へ向けた生涯変化 ③方言形へ逆戻りする生涯変化
独立変数: [言語内的要因]	a) 名詞の拍数 ¹⁰ (2・3・4拍), b) 名詞のアクセント型 (平板・頭高・中高・尾高), c) 述部のアクセント核の有無, d) <u>名詞の出現頻度</u> (1,2,3,4レベル), e) <u>名詞の親密度</u> (1,2,3,4レベル)
	※ 有核名詞のみの解析時に追加: b') 名詞のアクセント型 (頭高・中高・尾高), f) アクセント核の母音 (広母音あえお・狭母音いう)
	[社会的要因] g) 話者の性別 (男・女), h) 話者の年齢層 (調査 I: 50代・40代・30代・20代、調査 II: 70代・60代・50代・40代)

表7 分析対象名詞の出現頻度および親密度のレベル分け

	1拍名詞(15語) ¹¹	2拍名詞(60語) ¹²	3拍名詞(46語) ¹³	4拍名詞(25語) ¹⁴
頻度				
レベル1	5万語以上(2語)	1.5万語以上(10語)	4万語以上(7語)	3千語以上(5語)
レベル2	1万以上5万語未満(4語)	1万語以上1.5万語未満(7語)	1万語以上4万語未満(4語)	1.3千語以上3千語未満(5語)
レベル3	3千以上1万語未満(3語)	5千語以上1万語未満(12語)	5千語以上1万語未満(7語)	3百語以上1千語未満(7語)
レベル4	3千語未満(4語)	5千語未満(30語)	5千語未満(27語)	3百語未満(8語)
親密度				
レベル1	6.531 - 6.406(5語)	6.656 - 6.469(15語)	6.750 - 6.500(9語)	6.562 - 6.312(7語)
レベル2	6.250 - 5.812(5語)	6.438 - 6.281(14語)	6.469 - 6.312(11語)	6.250 - 6.156(5語)
レベル3	5.781 - 5.668(4語)	6.250 - 5.781(23語)	6.281 - 6.000(14語)	6.094 - 5.750(8語)
レベル4	4.625 以下(1語)	5.625 以下(8語)	5.906 以下(12語)	5.719 以下(4語)

なお、VARBRUL 解析では、上記のリスト化された独立変数(a~h)が各々に単独ではなく、同時多発的に従属変数の産出に影響を与えると想定されており、産出に対する正(促進)と負(抑制)の両面の効力の対比から独立変数間の階層的な力関係が明らかになる(Guy 1987)。また、VARBRUL 解析では、上記リストで提起された仮説モデルが実際の言語運用データ(ここでは名詞アクセントの読み上げ)の揺れをどれだけの確に説明しうるかという「仮説モデルと変異の適合度」も数値化してくれるため、より適切な仮説モデルへの改訂にも役立つ(Preston 1989)。

各独立変数の効果(weight)は0~1の間で示され、0.5(中立値、即ち、促進効果も抑制効果もない)を境に「従属変数の産出を促進」する力が強まるほど1へ近づく値を示し、逆に「産出を抑制」する力が強まるほど0へ近い値となる。これらの効果値は「蓋然性指数」(probability)とも解釈でき、本結果は本調査の被験者および分析対象名詞群のみに限定的に当てはまるというわけではなく、同類の言語共同体または社会集団(例えば、札幌市)の他成員が類似のコンテクスト下で類似の発話をした場合、同様の結果が得られるという推測が統計学的に成り立つ。

表8は、VARBRUL 解析に投入したトークン総数(3668)と従属変数のタイプ別内訳である。

表8 全経年データにおける従属変数のタイプ別分散

1990 から 2010-12 への推移	共通語的 アクセント の維持	方言的 アクセント の維持	共通語への 生涯変化	方言回帰の 生涯変化	合計 3668 発話 28名(男12/女16)
	2409 (65.7%)	914 (24.9%)	194 (5.3%)	151 (4.1%)	3668

4.1 拘束要因マップの提案

VARBRUL 解析の結果、以下のような独立変数間の相対的關係が明らかになった。図内では統計学的に有意(p<.05)とされる要因のみを挙げた。注記として、これらは皆、VARBRUL が行うステップ方式解析で統計学的に有意とされ選別された要因であり、名詞の出現頻度および話者の性別は一貫して選別から漏れた。¹⁵

図1 札幌市方言名詞アクセントの共通語化を拘束する要因マップ:¹⁶

調査 I(1990) vs. 調査 II (2010-12)

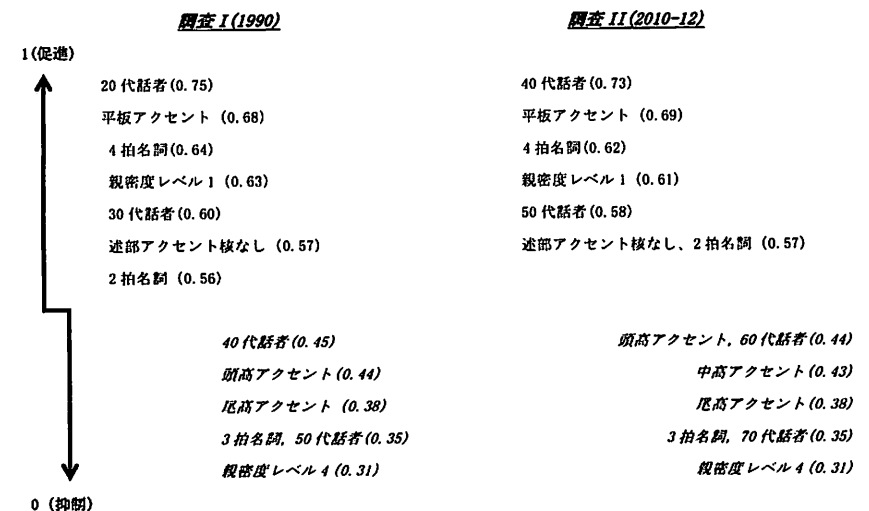


図1では、調査 I(1990)・調査 II(2010-12)間で、独立変数の相対的ランクおよび個々の効果値ともにほぼ完璧に近い合致が見られる。これはどちらの解析でも同一文の読み上げタスクにより産出された音声分析されていることにもよるだろうが、約20年を経ても個々人の言語運用上の変異を支配する拘束要因間の力関係や重みが普遍的に保たれていることを示唆する。

図1からは、この20年間の札幌市方言名詞アクセントの共通語化の系譜がある程度は読み取れる。若い世代の話者を中心に、日常生活の中で最も馴染み度が高く、(共通語体系では)平板式アクセントを持つ4拍名詞(表9、例:牛乳・チャンネル)から共通語化が始まり、同じく平板の2拍名詞(表9、例:水・風)が追従したと読み取れる。また、述部がアクセント核を持たない文脈の方が、主部の名詞は共通語的アクセントに成り易かったことも分かる。しかし、

これは「読み上げる」という人工的な発話行為において、述部にアクセント核がないことで、より主部の発話へのモニターの効きが増し、共通語的アクセントの産出が多かったという認知的作用の可能性もあるだろう。自然談話でも同じ結果となるのか、興味深いところである。

表 9 親密度レベル 1 (高) と親密度レベル 4 (低) に対応する分析対象名詞 ¹⁷

最高親密度 (レベル 1) 名詞	最低親密度 (レベル 4) 名詞
(1 拍) 絵・木・血・虫・手、(2 拍) 耳・夏・梅・水・冬・花・雨・ 風・秋・川・春・音・石・雪・色、(3 拍) テレビ・いちご・ビール・ 電話・力・心・電車・音楽・ラジオ、(4 拍) 牛乳・弟・妹・果物・ たんぼぼ・チャンネル・コスモス	(1 拍) 柄、(2 拍) 唇・帯・釜・旗・露・蜘蛛・蝶・餅、(3 拍) 柱・さざえ・刀・小麦・鯨・つつじ・鳥・紅葉・鬼・毛抜き・狐・ 小豆、(4 拍) 二次会・扇・小刀

一方、図 1 下部の抑制要因のヒエラルキーから、この 20 年間で中年層以上は共通語化にはあまり染まらず、日常生活の中で最も馴染みの浅い、(共通語体系では) 尾高アクセントの 3 拍名詞 (表 9、例: 刀・毛抜き・小豆) を筆頭に、続いて同類の 2 拍名詞 (表 9、例: 旗) で方言形が残留してきたことも分かる。また、共通語化を巡る今後の展開に関しては、特に調査 II のみで抑制要因として登場した「中高アクセント」(0.43) を持つ名詞が注目に値する。中でも特に馴染み度が最も低いレベルに属する名詞 (表 9、例: 小麦・つつじ・二次会・小刀) は、方言形 (または非共通語形の新型) アクセントが発現する最有力候補となるであろう。今後は中高アクセント音調が「北海道方言的響き」を指標する代表格となっていくのかもしれない。

これまで述べてきた規則性は、本調査で検証した被験者集団および名詞群に限らず、一般論として上記の諸条件を満たす名詞に当てはまるものと推測される。

なお、図 1 で設定された独立変数群と当該変異データの適合度 (つまり、仮説がデータを説明できている程度) については、VARBRUL 解析では「Chi-square per cell」値によって判定され、「1.5 以下」が適合を示す許容範囲とされる (Preston 1989)。当該解析では、調査 I (1990) が 1.88、調査 II (2010-12) が 1.87 と若干それを上回るため、当該変異を支配する他要因の存在の可能性や独立変数内の詳細設定に多少の改良の余地があることを示唆する結果となっていることも付記しておく。今後も機会など許せば、さらなる改良を試みたい。¹⁸

最後に、過去 20 年間で生じたと見られる生涯変化を解析にかけたい。前節でも指摘したように、今回の経年的調査において生涯変化は、共通語化と方言回帰の両方向で極めて小規模に見られたわけが、前節グラフ 4 でも眺めたように個人間での揺れも見られる。この揺れに何らかの規則性が内包されていないかを解析した。解析の結果、図 2 (共通語への生涯変化) と図 3 (方言形へ逆戻りする生涯変化) で示す結果が得られた。なお、独立変数群とデータの適合度は各々 0.80、0.93 で、図 1 の全体解析よりも大幅に改善されている。

図 2 札幌市方言名詞アクセントにおける「共通語へ生涯変化」の拘束要因マップ ¹⁹

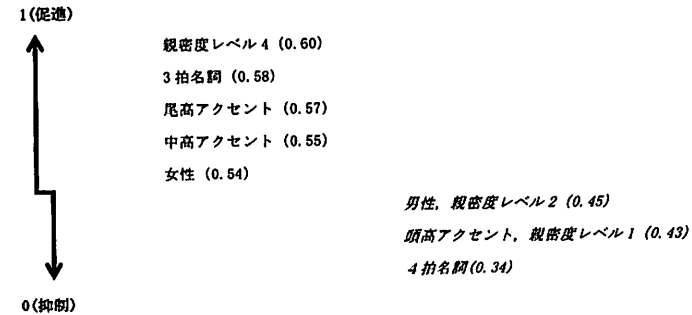
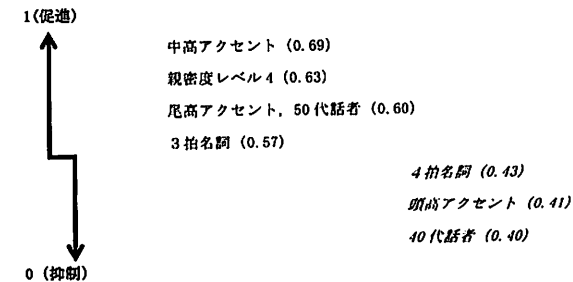


図 3 札幌市方言名詞アクセントにおける「方言回帰」の拘束要因マップ ²⁰



その効力はそれほど強いわけではないが、特に「語彙親密度」と「アクセント型」が個人語の経年的変化を左右する要因になっていることが分かる。共通語化への生涯変化 (図 2) については、共通語化の遅れている尾高・中高型アクセント名詞の中でも、特に日常生活で最も馴染みの浅い (レベル 4) 3 拍名詞 (表 9、例: 刀・小麦・つつじ・小豆) がその筆頭候補となり得る。これまでの議論から予想できることではあるが、すでに共通語化が進行してしまっている 4 拍名詞や馴染みの深い (親密度 1) 名詞、及び、4 拍名詞ほどは共通語化が進んでいない 2 拍名詞 (0.51) も、生涯変化の候補には挙がってこない。また、この変化で唯一、「話者の性別」が有意と判定され、女性 (0.54) が男性をリードしている (男性はむしろ拒絶 [0.45]) ことが分かった。さらに、この変化が特定の年齢層集団で特徴的に見られるものではないことも示されている。

一方、方言回帰の生涯変化 (図 3) については、上でも指摘した「北海道方言的指標」候補としての「中高アクセント」を持ち、馴染みの最も浅い 3 拍名詞 (表 9、例: 小麦・つつじ) がその筆頭候補となっている。ここでも 2 拍名詞は有意要因として挙がってこない。また、共通語への生涯変化とは異なり、話者年齢も方言回帰を左右する要因となっており、その中心勢力は「テレビ世代」の 50 代話者集団、それよりも若い世代 (40 代) ではむしろ方言回帰を拒絶、60・70 代の老年層では一般的ではない。

5. 最終報告へむけて

本稿では、筆者が 2010 年より札幌市山鼻地区で行っている経年的パネル調査の第三次報告を

行った。第二次報告(高野 2014a)時点では、今回の記念論集を最終報告の場とする予定であったが、言語内の要因としての語彙特性(出現頻度や親密度)に関する分析が残っていたため、本稿で中心的に取り上げた。

今後は、1990年当時20代であった最も若い世代の話者(12名)の調査が未だ終わっていないため、できるだけ早い時期に消息をつきとめデータを収集するつもりである。また、当時中学生、小学生であった被験者にもできるだけ接触を試みたい。最終報告では、それらもデータベースに加え、特に話者要因としての「社会的要因」のカテゴリー化を中心に、今回の言語内の要因も含めた様々な影響因子のネットワークの中で、共通語化および特定の生涯変化がどのように押し進められてきたのか、そして今後どうなっていくのか、などといった因果関係の総合的な解明に焦点を当てるつもりである。

【謝辞】 本調査は、研究の趣旨をお汲み取りいただき、先行調査資料のご提供をいただいた小野米一先生、および再度被験者としてご協力をいただいた山鼻住民の皆様のお陰で成り立っています。この場をお借りし、厚く御礼を申し上げます。また、分析作業の補助してくれた中村裕介氏、丸和紗氏、佐藤萌氏にも心より感謝を申し上げます。最後に、本調査の成果発表の際に、有益なコメントやご助言をいただいた北海道方言研究会の会員の皆様にもこの場をお借りし御礼申し上げます。

参考文献

- 天野成昭・近藤公久(編著)(2003a)『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第1巻 単語親密度』三省堂
- _____. (編著)(2003b)『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第7巻 頻度①』三省堂
- 尾崎善光(1986)「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷〜名詞篇〜」日本学報 第6号 67〜110頁
- 小野米一(1991)「札幌市方言多人数調査票について」『東日本の音声〜調査票編〜』日本語音声における韻律的特徴: 東日本における音声の収集と研究(研究代表者 加藤正信) 41〜59頁
- _____. (1993)「札幌市方言多人数調査資料について」『東日本の音声 論文篇(3) 主要都市多人数調査(札幌市・名古屋市)報告』研究成果報告書(研究代表者 加藤正信) 51〜86頁
- 高野照司.(2011)「札幌方言名詞アクセントの実時間研究 〜山鼻地区パネル調査 第一次報告」北海道方言研究会会報 第88号 40〜58頁
- _____. (2014a)「札幌方言名詞アクセントの実時間パネル調査 第二次報告 〜変異理論的考察を中心に〜」北海道方言研究会 第206回例会 札幌市北区民会館
- _____. (2014b)「札幌方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 〜老年層話者の「生涯変化」に着目して〜」北星論集 第52巻 第1号 13〜29頁
- 馬瀬良雄(1996)「テレビと地域語の変容」日本語学 第15巻、第10号、13-27頁
- 松田謙次郎(2004)「ことばのバリエーション研究」『ことばの科学ハンドブック』研究社
- _____. (2006)「VARBRUL プログラムとは何か」Talks No.9、神戸松蔭言語科学研究所
- Guy, G. (1987). Advanced varbrul analysis. In *Linguistic Change and Contact: Proceedings of the 16th Annual Conference on New Ways of Analyzing Variation*. Austin, TX., pp. 124-36.
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- _____. (1994). *Principles of Linguistic Change: Internal Factors*. Cambridge, MA: Blackwell.
- _____. (2001). *Principles of Linguistic Change: Social Factors*. Malden, MA: Blackwell.
- Ota, I., & Takano, S. (印刷中)「The media influence on language change in Japanese sociolinguistic contexts.」In J. Androutsopoulos (ed.), *Mediatization and Sociolinguistic Change*. Mouton de Gruyter.
- Preston, D. (1989). *Sociolinguistics and Second Language Variation*. New York: Basil Blackwell.
- Sankoff, D., & Labov, W. (1979). On the uses of variable rules. *Language in Society* 8: 189-222.
- Stuart-Smith, J., Pryce, G., Timmins, C., & Gunter, B. (2013). Television can also be a factor in language change: Evidence from an urban dialect. *Language* 89(3): 1-36.
- Takano, Shoji. (2014c) A real-time study of standardization of lexical accents in Sapporo Japanese: What can we generalize from panel samples? Oral Presentation, Sociolinguistics Symposium 20 in Jyväskylä, Finland.
- Trudgill, P. (1972). Sex, covert prestige and linguistic change in the urban British English of Norwich. *Language in Society* 1: 179-95.
- Weinreich, U., Labov, W., Herzog, M. I. (1968). Empirical foundations for a theory of language change. In W. P. Lehmann & Y. Malkiel (eds.), *Directions For Historical Linguistics: A Symposium*. Austin, TX: University of Texas Press. Pp. 95-188.

1 本調査は、文部科学省科学研究費・基盤研究B(No.25284082)『変異理論の展開と日本語変異データの多角的分析』(代表者・松田謙次郎、2013〜2015年度)からの助成を受け行われている。

2 先行調査に参加した被験者を再調査し、前回調査以降の経年的変化を各被験者ごとに見極める調査手法。

3 当該調査のこれまでの成果は、高野(2011)において第一次報告、高野(2014a)において第二次報告、それらに分析データを追加するなどした改訂版を高野(2014b)およびTakano(2014c)で発表済みである。

4 辞退・不明・死亡・転居などで70歳代話者17名中7名、60歳代話者15名中7名、50歳代話者16名中7名、合計21名が収集不可能となった。

5 各被験者個別の得点割合および経年的変化については高野(2014a)、Takano(2014b)で発表済み。高野(2014a)の発表資料については、2015年1月発行予定の北海道方言研究会会報に掲載予定である。

6 4拍名詞については、調査Iの年齢層別平均値が明確に把握できなかったためここでは図示しないこととした。

7 本稿では、評定実験の各種モードの中から、文字単語と音声単語の提示開始時点を同期させて被験者に提示する「文字音声同時提示モード」の数値を解析に利用した。

8 VARBRUL解析は、独立変数間の相互作用(何らかの関連がある)を許さない。語彙の頻度と親密度は中程度の相関を持つことがすでに証明されているため(天野・近藤2003b)、当該2変数については同一の解析に含まないよう適宜入れ替えをして解析作業を行った。

9 これら3種類の従属変数のVARBRUL解析は、一つずつ個別に行われた。

10 1拍名詞はどの世代でもほとんど共通語化してしまっているため本解析からは外す。

11 語彙頻度のうち「柄(が長い)」「氣(が重い)」の2語はデータベースに含まれていなかった。また、注10と同じ理由から当該1拍名詞の出現頻度と親密度は本解析には投入しなかった。

12 語彙頻度のうち「風(が吹く)」はデータベースに含まれていないため解析から除外した。

1. 夕日の車窓

人生には、めったにない経験が一度や二度はあるものだ。私の研究生活にも同じことが言えた。…その日の朝、私は、滋賀県甲賀町(現甲賀市)にあった。たまたま、駅近くの郷土史研究家、渡辺正勝先生(元県立高校教諭・製薬会社役員)宅をお訪ねして、話者のご紹介をお願いした。理解ある同氏であった。さっそくのご案内で川沿いに歩いて、「滝 638 番地」、藪宗一さん方の戸を叩いた。

その屋敷は、竹林の奥に沈んでいた。藪さんは、1910(明治43)年生れ、72歳、専業農家の戸主である。18歳の折り、浜松へ出て1年を過ごした以外に、土地を離れたことのない、根つからの地の方だった。私は、用意していた運動動作99項目の呼称をお尋ねした。イラストを示し、「この動作は、何と言うか?」と問うて、およそ使わないと思われるものまでふくめ、予想回答形を差し向けて、その反応を、逐一、聞き書きした。調査表は、「行列」化されており、「列(経)」には、呼称(語)、「行(緯)」には、動作(項目)が並べてあった。……

ところが、宗一さんとしたら、1つの項目動作に、いくつもの呼称を返してこられるのだった。たとえば、動作「2人でもっこを〜」で言えば、こうである。

カク、カズク、サシカズク、イナウ、ナカイナイスル、
サシイナイスル、ツル、ナカヅル、…

この奔放とも言うべき宗一さんの回答ぶりは、運動動作の相当な項目にわたって変わらなかった。いきおい、私は、お尋ねの間中、振り回されたかたちとなった。彼は、他所ことばまでをない交ぜにして答えて寄越してくれているのでは?と、私は、密かに怪しんだ。なることなら、1つ、2つ程度に抑えて答えてくれればと、願っていたのだ。

お尋ねの間中、町は、俄か集中豪雨に見舞われていた。調査を終えて、渡辺先生に見送られ、草津線の車中の人となった私は、先生へのお別れの手を振りつつも、複雑な気持ちに包まれていた。町を奔馳して流れる濁水や、深い水溜まりが、いくつも、視野から消え去っていった。……

拓植で、関西本線亀山行の列車に乗り換え、一人占めの座席に座った私は、さっそく、腑に落ちぬ宗一さんの内省データの、いくつかをピックアップして思索にかかっていた。調査票の裏側にイラストを描き、反応の呼称群を配置しなおしてみたのだ。訝しみつつも、一方では、その回答の背後に、何か動くものがあるのを感じてならなかったからである。

車窓に差し込んでくる夕陽が私の背中を焼いた。……

2. 日常(直観・暗黙)知は語彙(志向)図式を持つ

車中での、かりそめの整理からでも、宗一さんの内省データが持つ、意外なまでの秩序が、すでに、カオスを覗かせていた。その後の整理もふくめてのことだが、彼は、モノを指定するのに、混乱しているのではなかった。用いるべき呼称を自在に組み合わせ、視点(=関心焦点)を変えつつ、指定すべき動作群を個々にはなく、全体との繋がりの中で、的確にとらえ分けていたのである。

たとえば、呼称カズク、オイネルを例に、その点を見てみよう。…… 藪さんは、まずは、この2個の呼称を述語化させていた。その呼称を述語判断「(それは)、カズク(動作)であるか?」、「(それは)、オイネル(動作)であるか?」の形式に引き戻していたのだ。その上で、動作の標識としての呼称、即ち、述語のペアを一体化させて用いるべく、語彙の姿に図式化していたのである。両述語を別々にではなく、肯、否の両面にわたって組み合わせ一私は、それを「交差」と呼んだ一、解釈の構え「志向(語彙)図式(=図式語彙)」を編成していた。

- 13 語彙頻度のうち「命」(が惜しい)はデータベースに含まれていないため解析から除外した。
- 14 語彙親密度のうち「すずらん」(が咲く)はデータベースに含まれていないため解析から除外した。
- 15 語彙頻度が共通語化へ与える影響の方向性は、語彙親密度のそれと同様で、頻度の高い名詞の方が共通語化を促進し、頻度の低い名詞は抑制に働く。性別は男性が0.49、女性が0.51であった。
- 16 図中のアクセント型は、共通語でのアクセント型を示す。
- 17 ただし、注10と同様の理由から、1拍名詞は本解析に含めていない。
- 18 念のため、平板式アクセントの名詞を除き、有核アクセント(頭高・中高・尾高)名詞のみ(2521トークン)を同様の解析にかけたが、適合度はさらに悪化した(調査I: 1.96, 調査II: 1.90)。調査Iでは、アクセント型は有意とは選別されず(頭高0.52, 中高0.48, 尾高0.48)、他要因の相対的關係は効果値に若干のずれはあるものの図1と大きく変わらない。調査IIでは、アクセント型は有意となり(頭高0.54, 尾高0.48, 中高0.43)、他要因については調査Iとほとんど差異はない。図1でも指摘したように、調査II(2010・12)では「中高アクセント」が共通語化の抑止要因として勢力を振った結果が出た。なお、アクセント核を持つ母音の特性(広母音あえお・狭母音いう)は両調査で有意とはならなかった(調査I: 広0.50, 狭0.50; 調査II: 広0.51, 狭0.49)。
- 19 図中のアクセント型は、共通語でのアクセント型を示す。
- 20 図中のアクセント型は、共通語でのアクセント型を示す。